

浮舟辞世歌の行方

徳岡涼

はじめに

『源氏物語』浮舟歌の中で解釈が分かれていて困難なものといえは、手習巻の、

袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけほの

(「浮舟」『新日本古典文学大系五』・三七八頁)

であろうか。袖ふれし人が、匂宮なのか薫なのかが争点になつてゐることは周知の通りである。稿者自身は、その結論を得てはいないが、そこに至るまでの浮舟の歌を一首一首丁寧に読み直すことから始めなければならないという感触を持つてゐる。

たとえば、浮舟の人生にとって一つの契機を迎える辞世歌である。薫を裏切り匂宮と契りをかわしたものの、どちらかを選ぶことは出来ず、自死するという決意をする。浮舟が最も思い詰める場面である。

宮は、いみじきことどもをの給へり。いまさらに人に見むと思へば、この御返事をだに、思ふまゝにも書かず。

からをだにうき世の中にとゞめずはいづこをはか
と君もうらみむ

とのみ書きて出だしつ。かの殿にも、いまはのけしき見せたてまつらまほしけれど、ところどころに書き置きて、離れぬ御中なれば、つひに聞きあはせ給はんこと、いとうかるべし。すべていかになりけむと、誰に

もおぼつかなくてやみなんと思い返す。

京より、母の御文持て来たり。

寝ぬる夜の夢にいとさわがしくて見えたまひつれば、誦経ところ／＼せさせなどし侍るを、やがてその夢の後、寝られざりつるけにや、たゞいま昼寝して侍る夢に、人の忌むといふことなん見えたまひつれば、おどろきながらたてまつる。よくつゝ、しませ給へ。人離れたる御住まひにて、時／＼立ち寄らせ給ふ人の御ゆかりもいとおそろしく、なやましげに物せさせたまふをりしも、夢のかゝるを、よろづになむ思う給ふる。まゐり来まほしきを、少将の方の、猶いと心もとなげに物のけだちてなやみ侍れば、片時も立ち去ること、といみじく言はれ侍りてなむ。その近き寺にも御誦経せさせたまへ。

とて、その料の物、文などを書き添へて、持て来たり。限りと思ふ命のほどを知らで、かく言ひつゞけたまへるも、いとかなしと思ふ。

寺へ人やりたるほど、返り事書く。言はまほしきこと多かれど、つゝましくて、たゞ、
のちに又あひ見むことを思はなむこの世の夢に心まどはで

誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを、つく／＼と聞き臥し給ふ。

鐘の音の絶ゆるひゞきに音をそへてわが世つきぬと君に伝えよ

卷数持て来たるに書きつけて、「こよひはえ帰るまじ」と言へば、物の枝に結びつけておきつ。乳母「あやしく心ばしりのするかな。夢もさわがしとの給はせたりつ。宿直人よくさぶらへ」と言はするを、苦しと聞き臥し給へり。

〔浮舟〕『新日本古典文学大系五』二五五―二五七頁・傍線稿者

浮舟は、匂宮からの手紙に、返歌を認める。そして、薫にも最期を伝えたいと思うものの、匂宮と薫の親しい間柄を考え、いつか聞き合わせられた時の辛さを考え、薫へは辞世歌を詠まない。

そして、京の母からの文が届く。夢に浮舟の姿を見たため、誦経をさせているが眠れず、昼寝をしたところ、また不吉な予兆を見たので手紙を認めたという。浮舟が人気の遠い所に居り、薫の正妻から迫害があるかも知れないと案じ、宇治に向かいたいが、少将の方（浮舟妹）が患っている。そばを離れられない。だから、そちらの近くの寺で誦経をさせなさい。と縷々と認めてある。そこで、浮舟は、

寺に使いの者をやるのだが、その間に、母への返事を書いた。その内の一首が先に掲げた「のちに又―」の辞世歌である。「返り事書く」「巻数持て来たるに書きつけて」と「書く」行為が二度記されるが、前者は身辺にあつた紙に書き付けられたのであろうか。少なくとも二首目の歌は、使者が持ち帰った「巻数」に書き付けられている。

なお、青表紙本は「持て来たるに書きつけて」とのみあり、「巻数」とするのは河内本、別本系統である。ただし、蜻蛉巻において「かの巻数に書きつけたまへりし」とあるので、辞世歌が「巻数」に書き付けられていたことは明白である。

「巻数」とは『日本佛教語辞典』（平凡社）には、

「かんす」とも読む。祈祷または追善供養のために陀羅尼を誦し、経文を読んだとき僧がその読経した陀羅尼、経文の名や度数を書いて願主に送った目録。これを木の枝に結んだので、「巻数一枝」などといい、その木のことを「巻数木」という。

と説明されている。さらに、「ものの枝」に結びつけておいたとされるが、これは、元々阿闍利が結びつけて送った「巻数木」であり、巻数を浮舟は一旦ほごいて、辞世歌を書き付け、巻数木に結びつけたと推される。

その状況を踏まえた上で、「鐘の音の―」の歌を改めて

読み解くと、「山寺の鐘の音が消えてゆく余韻に私の泣く声を添えて、私の命は終わりましたと母君に伝えて下さい」（『新大系』脚注）とするのは、一見首肯されるのだが、この理解で本当に良いのかという疑問が湧いてくる。それは、辞世歌を巻数に書き付け、巻数木に結びつけた浮舟の行為の意味を考えなければならぬと思うからである。

一、浮舟辞世歌の研究史

これまでの源氏物語の注釈書は、この浮舟歌をどのように理解してきているだろうか。この歌に注を付けるのは、『源氏物語提要』を嚆矢とする。

鐘の響に我なくねをそへて、さて我世もつきぬると母君につたへよと也。京のつかひ、今宵はかへるましきと申せは、此二歌を母の文にゆひ付けてをき給ふ也。さて姫君はめのとなどにも此事しらせたく覚しけれとも、涙もせきあへず、又人の心もはかりかたくて、いひ出給はずふし給ふに、人々も夜もふければね入ぬ。

（『源氏物語提要』）

先に検討したように、浮舟の二首目の返歌は、使者の持ち帰った「巻数」に書き入れられ、巻数木に書き付けられている。その意味で「此二歌を」という箇所は不審である。

『河海抄』『花鳥余情』あるいは三条西流の注釈書はこの歌に注をつけない。

その他、連教師の注釈書が、
ねをそへてとハ我なくねをもそへてと也、君にとハ親のこと也
（『一葉抄』）

浮舟 此祈の鐘のひ、きに我なく音をそへてわか世つきぬと母につたへよとよめる哥也
（『萬水一露』）
という注をつけている。

現代の注釈書では、以下のように読み解かれている。

誦経の鐘の音が消える余韻に、私の泣く音をも加えて、私の一生が尽きてしま（死んで行）ったと、風の音は母君に伝達してくれよ。
（『日本古典文学大系』）

鐘の音の絶えてゆく響きに泣く声を合わせて、わたしの命も終わったと母君にお伝えください。
（『日本古典文学全集』）

あの誦経の鐘の音が消えてゆく響きに、私の泣く音を添えて、私が死んでいったと母に告げてほしい。
（『新潮古典集成』）

右に掲げた解釈のなかで『大系』の解釈が、母に伝える仲介者を、「風」としていることが着目される。これは、玉上塚彌氏が、次のように理解されてきたことと同意である。風に乗って来る鐘の声の余響が消えて行く。風は、こ

の鐘の声を、わが泣く声とともに、京に、母に、伝えて欲しい。
（『源氏物語評釈』第二二巻）

として、催馬楽の、「道の口、武生の国府にわれはありと、親には申したべ、心あひの風や、さきんだちや」を踏まえていると見る。最後に会った時、母が、「武生の国府に移ろひたまふとも、しのびては参りきなむを」と言ったことから、この催馬楽を踏まえたものが浮舟辞世歌とみただのである。確かに、浮舟歌の直前には、「誦経の鐘の風につけて聞こえ来るを」とも描かれている。この理解を助ける歌として、『古今和歌六帖』第五・雑思の「人づて」に、

はるはまづあづまぢよりぞわかくさのこの葉つげよ
むさしのかぜ
（二八六四）

とあることから、風というものが、言葉を伝えるものと見なされた意識が窺える。あるいは、のち『狭衣物語』において、飛鳥井の女君が入水する直前に、狭衣の筆跡の残る扇に、認めた辞世歌、

早き瀬の底の水屑になりにきと扇の風よ吹きも伝へよ
（『狭衣物語』巻一『新編古典文学全集』一五二頁）

は、浮舟辞世歌と同工異曲で、扇の風に、自分が身を投げ、流れの速い瀬（虫明の瀬戸）の水屑となっていることを伝えて欲しいとしたもので、その仲介を「扇の風」に頼んでいる。

一方、この辞世歌については小町谷照彦^{〔1〕}氏が、以下のよ
うに詳細に読み解いておられる。

母親が夢見を案じて寺で誦経せよと指示してきたの
に従って手配したが、その誦経の鐘の音が風に運ばれ
てくるのを、聞きながら詠んだ歌である。「鐘」の縁
語、「ひびき」「音」「つき」を連ねたすぐれた技巧が
見られる。この歌も母への贈歌と解されているが、鐘
の音の消えていく響きに、私の泣き声を添えて、私の
命も尽きた、と母君に伝えておくれ、という歌の内容
からも知られるように、母への伝言という形になって
いる。誦経の目録に書き付けて木の枝に結びつけてお
いたとあり、寺に使者を遣わした間に書いたという前
の歌と比べて、この歌は体裁が異なっているように思
われる。これが枝巻数とすれば、枝巻数に伝言を託し
た、贈歌的独詠ということになるのではないか。自殺
宣言のようなこの歌を、直接母に伝えるのは忍びない
ということ、伝言的な歌にした、浮舟の最後の心づ
かいがうかがわれるのである。

小町谷氏は、「枝巻数に伝言を託した」と記されており
「風」に託したとみる『大系』や玉上氏の説とは異なる。
先に記したように、稿者自身は、この「枝巻数」に浮舟が
辞世歌を書き付けた所作には、何か理由があるのではない

かと感じている。

仲介者を「風」として、あるいは「枝巻数」として、実
際は、浮舟辞世歌を、誰がどの様に目にしたのか。辞世歌
がどの様に誰の手に渡ったのか物語の展開を確認しておき
たい。

二、浮舟辞世歌を読んだ人々

蜻蛉巻の冒頭は、浮舟が失跡したことを大騒ぎする女房
達の描写から書き起こされるが、前の使者が戻ってこな
かったことを心配した母親から、再び使者が使わされ、そ
の手紙の内容が叙される。続けて、

よべの御返りをもあけて見て、右近いみじう泣く。

さればよ、心ほそきことは聞こえ給ひけり、我に、な
どかいさ、かの給ふことのなかりけむ、幼なかりし程
より、つゆ心おかれたてまつる事なく、塵ばかり隔て
なくてならひたるに、いまは限りの道にしも我をおく
らかし、けしきをだに見せたまはざりけるがづらき事、
と思ふに、足摺りといふ事をして泣くさま、若き子ど
ものやうなり。（『新日本古典文学大系五』二六五頁）

と、右近が、最初に浮舟の遺書（辞世歌も含まれたもので
あろう）を見たという。更に、匂宮も浮舟を案じて時方を

使わせ、いち早くその死を知るが、ここでは浮舟の遺書を目にしてはいない。

次に到着したのが、母親であり、ここで遺書を見たのであるが、そのことは物語には描かれない。侍従が、浮舟の様子を思い出しながら、硯の下の手習いを発見、

嘆きわび身をば捨つとも亡き影にうき名流さむことをこそ思へ
〔浮舟〕同・二五五頁

の歌が認めてあったことから、死を意識していたことを察知し、侍従と右近とは、薫、匂宮との三角関係が失踪の背景にあったことを思う。そして、亡骸のない葬送が、近親の僧達によつて質素に執り行われる。

その後、漸く御庄の人―大夫や内舍人から伝わり、薫の知るところとなるのだが、母女三宮の病平癒祈願のために石山参籠の最中であり、駆けつけることは叶わない。薫、匂宮双方の、心中描写、駆け引きが書き継がれ、四月に入り、匂宮は詳しい事情を知りたく、右近を迎えに時方を遣わせるが、右近は承知せず、代わりに侍従が匂宮の元を訪れる。ここで、匂宮は、

「御文を焼き失ひ給しなどに、なべて目を立て侍らざりけん」など、一夜語らひ給ふに、聞こえ明かす。かの巻数に書きつけ給へりし、母君の返事などを聞くゆ。
〔蜻蛉〕同・二八四頁

とあるように、母親の次に、あの浮舟の遺書が伝えられたのは、匂宮であったことが、右の描写からわかる。

薫も、真実を知りたくて、宇治を訪れるのだけれども、ここには、遺書のことは全く触れられていない。

これまで、辿ってきたように、右近や侍従によつて発見された遺書は、物語の上では描かれないが母親が目にし、次に侍従から匂宮へも伝わったことになる。そして、薫も目にしたのかもしれない、という伝わり方をしている。右近かあるいは侍従を介して母親に伝えられたとして、仲介者は、この二人ということになるのだろう。このことから、右近か従者を介して母に伝わるものとみた暗黙の下での解釈が施されてきたのかもしれない。しかし、後の展開から浮舟歌を読み解くことには慎重でなければならぬ。

なお、浮舟は、入水の直前に匂宮からへの書簡に、返歌を書き送っており、この匂宮への歌を再掲すると、

からをだにうき世の中にとゞめずはいづこをはかと君
もうらみむ
〔浮舟〕同・二五五頁

歌意は、「亡骸だけでもこのつらい世の中に残さないのならば、どこを目当てにあなたは私をお恨みになれましよう。」(『新大系』脚注)とあるように、匂宮のことを歌の中で「君」と称していることが分かる。この歌を、母親に向けた歌と並べて考えてみると、「君」を母親と理解する

ことの、奇妙さが浮かび上がるのではないか。

匂宮へは、従者が浮舟からの返事を届けたはずである。

君とは、その返書を先ず紐解いた匂宮自身が指されていることは間違いない。一方、枝巻数を持ち帰り、母親が真つ先に紐解くことを想定して失踪直前に浮舟が歌を詠んだとするならば、「君に伝へよ」を、母親だと理解することは無理なのではなからうか。仲介するものが、「風」や「枝巻数」であるとしても、それは母親に感知出来る範疇ではない。また「風」や「枝巻数」という言葉が歌の中には全く詠み込まれておらず、その点からしても仲介する者を「風」「枝巻数」とするのは苦しい。もう一步踏み込んで、浮舟辞世歌は考えなければならぬ。

ところで、ここで、付け加えておきたいのは、大澤本源氏物語における蜻蛉巻における展開である。伊井春樹氏によつて詳しく紹介された、いわゆる別本の巻を多く含む一伝本である。この蜻蛉巻では、時方よりも先に母が到着したという。

大澤本では、母親が先に宇治に着き、早速右近や侍従からの報告を受け、残された歌などからすると入水した可能性をも聞き、それではせめて亡骸だけでも探したいとの主張を、それではかえって人々に入水したことを知らせてしまう結果になってしまうと説き伏せ

られ、車に遺品などを積み込み、急いで葬送をするしかない⁽³⁾と、僧なども手配してしまう。

やはり、右近や侍従を介して、浮舟辞世歌が伝わっている点には変わりはないようだが、先に記したように、後の展開は、辞世歌の理解をすることとは切り離して考えたいところである。

三、「君に伝へよ」の歌について

「君に伝へよ」という表現は、『源氏物語』以前には全く見出されない。特別理解しがたい表現ではないのだが、どのような場面で、誰に伝えて欲しいと詠み手が願っているのかを正確に読み取らなければならぬ。

例えば、『公任集』に以下のような類似した表現がある。

鎌蔵といふ所におはしたるに、□なかりければ、

忘れ草をとり給ふとて、寺にかくいへとての給う

ける (□は空白)

忘草かりつむ程に成にけり跡もとどめぬ鎌倉の山

返し

あり侘て枯にし宿の八重葎いづこをさして君に告げけ

ん (『新日本古典文学大系』四七四・四七五)

「しばらく来ない間に人も住まなくなり、忘れ草を刈り積

むほどに荒れてしまった。霊場があったという名残もない鎌蔵の山だね」(『新大系』脚注) に応じて「住み辛がって八重葎の宿を住み離れて行った住僧は、一体そのことをあなたにおしらせするつもりでどこへ御連絡いたしたのでしょうか。今までご承知でなかったとは。」(同)と、現在鎌倉に住んでいる僧が、公任が歌を贈った住僧に代わって「君に告げん」と詠み贈っている。

更に、『拾遺集』や『後撰集』にも収める次の敦忠の歌は、『大和物語』九二段にも載せ、そこでは、保明親王妃貴子に詠んだものとされる。

いかでかはかく思てふ事をだに人づてならで君に知ら
せむ (『拾遺集』恋一・六三三五)

歌意は「どうかかしてこのように私が恋い慕っていることを、人を介してではなく、直接あなたに伝えたいものだ」(『新大系』脚注) というもの。「君に云々」という表現が、誰かを經由してのものか、そうでないのか、注意を要することを喚起する歌である。

また、『源氏物語』以降には、『夜の寢覚』の欠陥部分に「君に伝えよ」という表現が見出される。『無名草子』にその場面を摘記する。

何事よりもいみじきことは、まさこと女三の宮との御間とこそ。院の勘当にていとほしたなき折、中納言の

君に逢ひて、

吹き払ふ嵐にわびて浅茅生に露残らじと君につた
へよ

と宣へば、中納言の君、

嵐吹く浅茅が末に置く露の消えかへりてもいつか
忘れむ (『新潮日本古典集成』)

と、冷泉院の第三皇女女三宮とまさこ君とは愛し合うのだが、その為、まさこ君は、冷泉院の勘当を受ける。まさこ君は、人目を憚り、女三宮の侍女の中納言の君に、託した歌に、「激しく吹く嵐(冷泉院の勘当)に耐えがたくて、浅茅の上に置いた露がまったく残らないように、わたしはどうして生きていられまい、と思っていると、女三の宮様にお伝え下さい」(『集成』) という。まさこ君の歌は、女三宮に向けての歌だが、中納言の君を仲介者としており、その場で、女三宮の返歌を中納言の君が代作している。

また、歌ではなくとも、『大和物語』十三段には侍女を介してのやりとりが以下のように描かれる。

藤原千兼と妻とし子は相思相愛の夫婦で、子供も沢山いたが、とし子は死去してしまう。とし子と仲の良かった一条の君が、とし子死去後も全く訪れてこなかったため、千兼が一条の君の従者が来合わせた時のやりとりが、

思ひきやすぎにし人のかなしきに君さへつらくな

らむものとは

と聞こえよ」といひければ、返し、

なき人を君が聞かくにかけじとて泣く泣くしのぶ
ほどな恨みそ
〔日本古典文学全集〕

と記される。従者を介して、「思ひきや」の歌を、「申し上げてください」とするもので、仲介者が明快に記される。これまで見てきたように、第三者が仲介する場合、その

状況や人物が明快に記されている。ところが、問題として
いる浮舟歌については、辞世歌が詠まれた時点での仲介者は明快でない。明快であることといえは、巻数に書き付けられ、枝に結わえられたということだけなのである。

巻数が、願主が所持するべきものであったことは、若菜上の明石入道が、自身の山ごもりを控えて、明石君へこれまでの巻数を託し、そのことを源氏に明石君が語る場面が描かれるところからも分かる。

……「かの明石の岩屋より、忍びてはべし御祈りの巻数、又まだしき願などはべりけるを、御心にも知らせたてまつるべきをしあらば、御覧じおくべくやとて待るを、たゞいまは、ついでなくて何かはあけさせ給はん」と聞こえ給に、……

〔若菜上〕『新日本古典文学大系三』二八五～二八六頁

このように願主が保管しておくべきものであったこと、自身が何らかの事情で所持できなくなったら信の置ける誰かに託すこともあったことが、右の記述からわかる。

一体、「君に伝へよ」の君とは、誰なのか。最初に抱いた疑問―巻数に書きつけ、巻数枝に結わえ付けたという行為の意味―を考えて、歌の理解に繋げたい。

四、巻数に歌を書き付けること

王朝の人々が、歌をさまざまなものに書き付け、意思疎通をはかったことは、私家集や物語に接してみると、多く見出される。書簡や歌を付ける折り枝という形ではなく、そのもの自体に書き付けているのである。それぞれに理由や目的があつてのことだと思われるが、『源氏物語』以前には巻数に書き付けた用例はない。書き付けられるもの(4)の用例から目を引くものを掲げてみたい。

- 1、扇(頼基集)「義孝集」「実方集」など、枕(小大君集)、枕を包んだ紙(義孝集)、鏡を置く敷物(信明集)「落窪物語」、らしい(櫛子)のかへた(為頼集)、盃の皿(伊勢物語)といった生活用品。碁石筥の蓋(後撰集)も一応生活用品とみておく。

この中には、生活用品でありながら、絵が描かれたも

の、わりこの歌多（「元輔集」）、おほわりこのふたに
いちひめ（市姫）のかたちなどかけるところ（「為頼
集」）など

「火桶の灰」（「落窪物語」）は、火箸で書いた例

2、摺り衣、摺狩衣（「伊勢物語」）、小桂（「為頼集」）旅
の衣（「実方集」）、衣のくび（「大和物語」）宿直物
（「後撰集」）といった衣装

3、細工物である、州浜の作り物（「能宣集」）など、この
類は「うつほ物語」に多い

4、壁（「大和物語」）など、「曹司」という表現のものも
ある（「嘉言集」）。遣り水の石（「伊勢集」）もこの範
疇だろうか。一切懸の削りくず（「大和物語」）など

5、かきのもみぢ（「伊勢集」）、瓜（「義孝集」）和泉式部
集）、萩の下葉（「馬内侍集」）、萩の青き下葉（「清少
納言集」）、柏の葉（「伊勢物語」「大和物語」）、柳・花
薄・竹（「うつほ物語」）といった植物

また、梅の花の花びら（「大和物語」）、花桜・藤・白
蓮（但し笄の先で書くとある）（「うつほ物語」）、山
吹のはなびら（「枕草子」）と花びらの例もある。

少々変わったところだと、『後撰集』（恋三・七〇）の
以下がある。平定文が、国経朝臣に仕えていた女に裏切ら
れ、彼女は、時平に迎え入れられた。自ずと定文との仲は

遠ざかり、文も通わす術がなくなつたので、「かの女の子
の五つばかりになるが、本院の西の対に遊び歩きけるを、
呼び寄せて、「母に見せたてまつれ」とて、腕に書きつけ
待ける」と詞書にあるように、「腕」に書き付けている。

およそ書き付けることが可能な物であるならば、ありと
あらゆる物に歌を書き付けていることがわかる。

巻数に書き付けた用例はないけれど、既に文字が認めら
れている紙に、更に認める、書き入れるということに通じ
ると思われる。このような形態のやりとりは、『後撰集』
に多く見出される。例えば、

異女の文を、妻の「見む」と言ひけるに、見せざ
りければ、怨みけるに、その文の裏に書きつけて
つかはしける よみ人しらず

これはかくうらみどころもなき物をうしろめたくは思
はざらん（恋二・六六七）

「この手紙はこのように裏を見るほどのものでもないのだ
から、怨みに思う種類のものではないのだから、不安に思
わないでほしいものですよ」（『新大系』脚注）他の女の文
を、妻が「見む」と言うのに見せなかつたので、怨まれた。
その文の裏に書きつけた歌。他の女を見せても構わなかつ
たという証として、異女の文の裏に書き付けたというのだ
ろう。また、

男の女の文を隠しけるを見て、もとの妻の書きつけ待ける
四条御息所女

へだてける人の心のうき橋をあやふきまでもふみ、つるかな
(雑一・一二二)

も、男が新しい女の文を隠していたのを見つけて、元妻が書き付けたもの。歌意は、「私を隔てているあなたの心の辛い端々を、危うく感じる程に、手紙ですっかり見てしまいましたよ」(同) 新しい女の文を見たという証になるのである。このような遣り取りが、男女間ばかりで行われたわけではないのが、次の例から分かる。

小野好古朝臣、西の国の討手の使にまかりて、二年といふ年、四位にはかならずまかりなるべかりけるを、さもあらずなりにければ、かゝる事にも指されにける事のやすからぬよしを愁へ送りて待ける文のかへりごとの裏に、書きつけてつかはしける
源公忠朝臣

たまくしげふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらむとおもひし

返し

小野好古朝臣

あけながら年ふることはたまくしげ身のいたづらになればなりけり
(雑一・一二三・一二四)

藤原純友の乱を討伐するために派遣された好古が、四位に

は昇進するだろうと思っていたにもかかわらず、五位の緋(あけ)の衣のままだった―昇進しなかったことを嘆いてきたのに同情したのが公忠の歌である。好古の書簡を確かに見たという証と、一方で、好古の書簡を自分の手元に留めおくことは良しとしなかったのかもしれない。

歌や書簡の遣り取りの状況が、右例よりもよくわかるであろう『蜻蛉日記』も見ておきたい。

兼家が他の女性に送ろうとしていた文を見つけた道綱母が、その文に書き付ける事柄が、天曆九年(九五五)九月の条に、

さて、九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを手まさぐりにあけて見れば、人のもとにやらんとしける文あり。あさましさに、見てけりとだに知られんとおもひて書きつく

うたがはしほかにわたせるふみみればこゝやとだえにならんとすらん

『蜻蛉日記』上・『新日本古典文学大系』四六頁)とあり、兼家に私の元への訪れが途絶えるのかと気が気ではない心情を伝える所作だったことが分かる。そしてそのことは、他の女性への文という証拠をつかんだことを兼家に訴えるものだったのだろう。

また、兼家の妹である登子の元に届けられるはずであつ

た、兼家からの文が誤つて道綱母に届いた安和元年（九六八）三月の条。

三月にもなりぬ。客人の御方にとおぼしかりける文を、持てたがへたり。見れば、なほもしもあらで、「近きほどにまるらんと思へど、「我ならで」とおもふ人やべらんとて」など書いたり。年ごろ見給ひ馴れにたれば、かうもあるなめりと思ふに、猶もあらで、いとちひさく書い付く。

まつ山のさしこえてしもあらじよをわれによそへてさわぐなみかな

とて、「あの御方へ持てまゐれ」とて、かへしつ。

（同・八六頁）

兄妹間に交わされるような文ではなく、住居が近くなので、参上しようと思うが、「自分以外の男にうちとけるな」と思っている男があなたのそばにいないかと思つて」（『新大系』脚注）と色めいて戯れかけた歌なので、「あなた（登子）には兄以上に親しい人がいるはずもないのに、浮気な自分と同じに考えて人を疑う兼家だ」（同）と、書き付けたもので、兼家の文共々登子に読ませ、二人の馴れ馴れしい関係をこの文から知ったということをも伝えることに眼目がある。

物語文学の中にも、贈歌が記される紙に返歌を書き入れ

た例は見出される。『うつほ物語』菊の宴に、あて宮の東宮入内が決まり、求婚者達が、一様に落胆する中、源宰相実忠の嘆きが一人である場面。何度もあて宮は、実忠への返歌を拒否するが、乳母子である兵衛の君から再三促され、湧くがごとももの思ふ人の胸の火に落つる涙のたぎりますかな

という歌に対して、以下のように応じる場面。

……「なほこの度ばかり一行聞こえさせたまへ。『こたびさへのたまはずは、やがて死ぬべし』と、惑ひ焦れたまふを見たまへば、いとみじくなむ」。あて宮、久しく思しわづらひて、かの文の端に、ただかく書きたまへり。

涙をばいか頼まむまた人の目にさへ浮きて見ゆ
とこそ聞け

（『うつほ物語②』九六・九七頁『新編日本古典文学全集』）

東宮入内が決まった身であるあて宮は、ほかの人も涙を流していると聞いている、と私情を吐露することなく、今の求婚者達の状況を詠むしかない。しかし、実忠の歌を自身を読んだことを伝えるために、右の様な返歌の形が撰ばれたのだと考えられる。

少し時代は下るが、『赤染衛門集』には、為基との贈答

歌の中に以下が見出される。

わづらひしに「君よりも」と言ひたりしに、書き付けておこせたる

昔よりうき世に心とまらぬに君より物を思ふべきかな

(三七・『和歌文学大系20』)

以前、為基が、病気になったとき、赤染が、「君よりも」(「あひままくほしきがためは君よりも我ぞまさりていぶかしみする」(万葉・卷十二問答歌)の三句を踏まえて、「貴方よりも物思いをしているという意を込めて、言いやったもの」(『大系』脚注)と詠んだもの書き付けてよこしたもので、為基歌は「昔からこの浮世には執着が無かったのだが、貴女のせいで執着することになった」(同)と赤染に応じたもので、赤染からの文がその執着の要因なのである。

あるいは、『蜻蛉日記』の如き、文違えの例も見出される。

この人、異男のもとにやりける文をもて違へて来たりしに、挙周に書き付けさせし

誰とまたふみ通ふらんうき橋のうかりしよりもうき心

かな (二三一・同)

これは、赤染衛門の代筆なのだが、表向きは、挙周が実際にこの人(明順女カ)への憤りを詠み贈った様である。

『赤染衛門集』には、以上に見てきた男女間の遣り取り以外にも、このような例が記されている。

さも言ひつべき人の安芸の守になりしに、使ふべきようありて樽を乞ひたりしに、たゞ少しの下し文をしたりしかば、書き付けて返しし

なか／＼に我が名ぞ惜しき柚川の少なき樽の下し文かな (四七九・同)

安芸の守に、必要があつて、樽を乞うたところ、その樽が少なかったので、添えられていた下し文に書き付けて安芸の守に返したという。樽とは、山から伐りだしたばかりの木のこと、[下し文]は、院の庁・寺社・幕府などから、その支配下の役所・人民に下した公文書のことだから、私信以外のものにも、歌を書き入れたことが見て取れる。

第三者を排して、当該する人物だけが、より限定的に歌を詠み贈り贈られる時、相手の筆跡の残る文に、その文を見たということを証しつつ書き込んで贈答していたのである。とするならば、問題にしている浮舟辞世歌も、願主への報告である巻数に認められることから、第三者を想定しない母へ向けたものという位置づけを得るだろう。やはり、「君に伝えよ」の君とは、母親を指したものではない。

五、浮舟辞世歌の「君」とは誰か

ここまであらゆる角度から検討を重ねてきたが、「君に伝えよ」の「君」が母親を示すものではないとしたら、誰を想定したらよいのだろうか。

それは、自ずと薫ということになる。

母親である中将の君は、薫の正妻から、浮舟が迫害を受けることを心配しつつも、薫の元での娘の幸せを願っていた。中将の君は、少将と浮舟とが破談になってからというもの、浮舟の婿を探し続け、二条院で、薫を垣間見た直後は、薫と匂宮とは甲乙付けがたいと思っていたが、熟考の末、例えば、

……この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かゝる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、我むすめは、なのめならん人に見せんはをしげなるさまを、夷めきたる人をもみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、くやしきまで思ひなりけり。

〔東屋〕『新日本古典文学大系五』・一五一頁

と、彦星の光を待ち受けるように、たまの逢瀬でよいから結婚させたいと考え、

……あいなう、大将殿の御さまかたちぞ、恋しう面影

に見ゆる。おなじうめでたしと見たてまつりしかど、

宮は思ひ離れたまひて、心もとまらず。侮りて押し入りたまへりけるを思ふもねたし。この君はさすがに尋ねおぼす心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけ給はず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひはてらるれば、若き人はまして、かくや思ひはてきこえ給ふらん、……〔同・一六九〜一七〇頁〕

匂宮と薫とを比較して、浮舟を軽ろんじて部屋へ押し入った匂宮よりも、浮舟のことを思いながらも何気なく振る舞う薫を好ましく思い、その気持ちは浮舟も同様だと決めたたりもする。

また、宇治に住まいを移した浮舟が、薫に迎え入れられることが決まってからは、

……「世とともに、この君につけては、物をのみ思ひ乱れしけしきのすこしうちゆるひて、かくて渡りたまひぬべかめれば、こゝにまゐり来ること、かならずしもことさらにはえ思ひたち侍らじ。かゝる対面のをりくゝに、むかしのことも心のどかに聞こえうけ給はらまほしけれ」など語らふ。〔浮舟〕同・二三三頁

とひとまず安堵の心情を弁の尼に吐露している。

母親である中将の君にとっては、薫は婿として申し分ない人物であった。実際、浮舟失踪後、薫の方から後々まで

の縁を結びおこうという書簡が送られ、細やかな書簡の遣り取りがされる。その際、中将の君は「斑犀の帯、太刀のをかしきなど袋に入れて」(同・蜻蛉 二九二頁) 浮舟の志として薫に差し出したりもしている。

浮舟は、母親が薫を、婿として自分に最も相応しい人物と考えていたことを知っていた。直接的には、薫は弁の厄に仲介を依頼して浮舟を三条の隠れ家から連れ出すのだが、少なくとも中将の君が中君に浮舟の将来を相談したことが契機となり、薫は浮舟に思いを寄せるようになったのである。

つまり、自身の死を、母親に伝えると同時に、母親から薫へも伝えて欲しい、その願いが込められて詠まれたのが、この浮舟辞世歌だと考えられる。

むすびにかえて——「源氏狭衣歌合」から——

『狭衣物語』の巻四の末尾部分には、亡き飛鳥井の女君が記した絵日記が、狭衣帝に女君の従姉妹を通じて届けられ、彼女の最期の歌が狭衣帝の目に触れる場面が置かれる。飛鳥井の女君の歌は、『物語二百番歌合』の「源氏狭衣歌合」に右歌として、左の『源氏物語』の歌と番えられている。六十八番では、問題としている浮舟歌が番えられてい

る。

六十八番

左 心からこのよをかきりにおもひすてけるよ

うきふね

かねのをとのたゆるひ、きにねをそへてわか世つきぬ
ときみにつたへよ

右 ときはのやまさとにてかきりにおほえけれ
は ますかふ

なからへてあらはあふよをまつへきにいのちはつきぬ
人はとひこす (『日本古典文学影印叢刊』14)

飛鳥井の女君の「なからへて——」の歌は、「命ながらえて、この世にあつたならば狭衣様にお逢いできる日も待つことができなのに、私の命は尽きてしまふ。けれども、あの方は尋ねてこない」(『新編日本文学全集』脚注) の意味である。「わか世つきぬ」「いのちはつきぬ」と類似する表現を用いた辞世歌ということで並ぶことになったのであろう。翻つて、改めて、浮舟辞世歌は、誰に向かつて詠まれたものであったのか。

薫から、京へ迎えられる日取りは知らされたものの長らく放置され、母中将の君にも一番会いたいときに会えなかった。だが、確かに、浮舟は、この二人に自身の死を伝えなかったのである。匂宮との恋は許されない運命だった

として、薫には顔向け出来ない。ただ、薫には自分の死を告げる必要がある。薫に向けて直接書き置くことが出来ないとするならば、母親から伝わるのが最善と考えたのだろう。巻数に書き、巻数枝に結いつけるという行為がそのことを示している。

物語は、浮舟失踪後、辞世歌の内容が、母親から薫に伝わるという展開ではないけれど、死を前にして、匂宮と薫の両者に心を砕いていた心中を読み取りたいと思う。

冒頭に掲げた浮舟歌の解釈は困難を極める。彼女の歌を、慎重に再読してゆくしか術はない。

注記

(1) 小町谷照彦「手習の君浮舟」森一郎編『源氏物語作中人物論集45―付・源氏物語作中人物論・主要論文目録―』

勉誠社（一九九三年）

(2) 伊井春樹「幻の大澤本源氏物語」『百舌鳥国文 第二〇号』

二〇〇九年三月

『幻の写本大澤本源氏物語』宇治市源氏物語ミュージアム（二〇〇九年十月）などに紹介され、「大沢本では、母君が先に宇治に着いているのだ。標準的な写本と異なる展開が22頁も続く。大沢本は主に、鎌倉―南北朝時代に作られたとされるが、蜻蛉巻は室町時代に補充されて作ら

れたとされる」（『源氏物語尽きぬ探求』朝日新聞）二〇〇九年十一月二一日朝刊」と報道された。

(3) 伊井春樹「浮舟の入水事件―大澤本源氏物語の特異な世界―」『むらさき』第四七輯武蔵野書院（二〇一〇年十二月）

(4) 書き付けた歌の論として、田中仁「和歌を書き付けること―八代集の「書きつく」―」『藝文東海』一八号終刊号（一九九二年二月）、同氏「書きつく」の意味―宇津保物語を主な資料として―」『言語表現の研究と教育』長谷川孝士教授退官記念論文集『長谷川孝士退官記念論文集』刊行委員会編 三省堂（一九九一年三月）があるが、論点が異なるため本論では掲げなかった。

(5) 扇の用例の中に、『元良親王御集』の以下がある。

あふぎおとしておはしたるをみれば、女のにて
てかけり

わすらるう身はわれからのあやまちになしてとだに

こそ思ひたえなめ

とあるかたはらに、かきつけてたてまつる

ゆゆしともおもほゆるかな人ごとにくとまれにける

よにこそありけれ

（一三六・一三七）

落とされた扇に、女の筆跡で、「あなたに忘れられた私、
せて自らの過ちのためと思ひなして、あなたを恨みま
せん」とある。それを見た別の女が「不吉なことと思わ

れることですよ。お逢いになる女ごとにあなたはうとまれる、そのような男女関係なのです」と添えて奉ったという。親王の浮気癖をたしなめるためには、別の女の筆跡に、重ねて示すことが効果的ということだったのであろうか。同様に『和泉式部集』に

ある人のあふぎとりてもたまへりけるを、御ら
んじて、大との、たかぞとはせ給ひければ、
それがときこえ給ひければ、とりて、うかれめ
のあふぎとかきつけさせたまへるかたはらに

こえもせむこさずもあらん逢坂の関守ならぬ人なと
がめそ (二二五)

ある人が扇を持っていたのを、道長が見て、それは誰のかと尋ねたところ、和泉式部のもと答えたところ、その扇に「浮かれ女の扇」と書き付けさせた。その傍らに式部自ら、

「ふしだらな男女関係を結ぶことはないのです。だから、それを咎めるには及ばない」としたものである。その場で「浮かれ女」ではないと否定することに意味があるのであらう。

(6) 執着を表現した歌として、『後撰集』の以下の例もある。

故宮の内侍に兼輔朝臣忍びてかよはし侍ける文
を取りて、書きつけて、内侍につかはしける

など我が身下葉紅葉となりけん同じなげきの枝に
こそあれ (秋下・四二九)

兼輔から宮の内侍への手紙を手に入れて、その手紙に書き付けたという。「どうして我が身は、下葉が紅葉するよ
うに、人に知られない心の下で燃えていたのでしょうか。
兼輔朝臣と同じくあなたを求めて嘆き続ける投げ木の枝
でありましたのに」(『新大系』脚注) 兼輔と同意である
ことを、兼輔の文を手に入れてまでもあらわしたもので
ある。

*本文の引用は、引用の末尾に記した通り。源氏物語の古注釈
は、源氏物語古注集成(桜楓社のち、おうふう)から、和歌
の引用は、歌意の引用も含めて、『新日本古典文学大系』。特
記していない箇所は、『新編国歌大観』からの引用に拠る。

(とくおか りよう・熊本大学文学部附属永青文庫研究センタ
ー客員准教授 平成十年年度本学大学院国文学専攻博士課程単位
取得満期退学)